



まこと館だより



Est.1912

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局

理事長閑話 うめ草③



～firstの落とし穴～

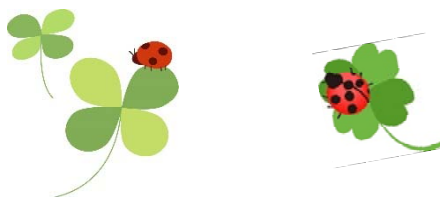
昔、三波春夫は「お客様は神様です」と言っていました。有名な言葉です。ご本人の真意は、「オーディエンスを前に、敬虔な心で神様に手を合わせるような真剣な想いを持っていなければ真実の歌芸は披露出来ない」という意味だったそうです。(歌芸の天地、1984、PHP 研究所)。しかしこの言葉の意味が取り違えられ、主客逆転し、客の側が「自分は神様だろう」と理不尽な要求の屁理屈になっては、真面目な店員の心が折れます。大切な理解は主も客も対等だという認識です。これは実にソーシャルワークの基本的な人間関係の価値観です。お互いが信頼・尊重し合える関係です。

利用者中心主義、パーソンセンタード・ケアが言われます。それは認知症の方のケアにおいて「尊厳のある一人の人として、周囲に受け入れられ、尊重されること、あるいはそのような理念を基にしたケア」という意味で使われます。なんでもかんでもその方の要求に応えるということではありません。その方を中心として、人・もの・財を調整して最善のケアを提供していくという考え方です。

トランプアメリカ大統領が「アメリカ・ファースト」と叫び、自国中心の政策を取っています。また小池百合子さんが都知事選挙の際「都民ファースト」というキャッチフレーズを使い大勝しました。これは自己・自国中心主義がその背景にあります。いわゆる「自己中」ですね。トランプさんは国際社会のリスクファクターです。また小池さんはその後の選挙で大敗です。

「自分ファースト」の考え方が、モンスタークレーマーを発生させ、スタッフにメンタル面のダメージを与え、職場を去らせるとしたらとても残念です。「自己中」はご本人が絶対に幸せになれません。自分も相手も社会も、そして国もです。信頼、協調、調和が幸せの基盤です。それが私の座右の銘、「中庸(ちゅうよう)」という生き方です。

理事長 橋本正明



事業本部長メッセージ

春爛漫です。春分の日には降雪が記録され驚きました。この時期、日が高くなりコントラストがはっきりすることに加えて、大勢の花々が「我先にと」まるで出番を待ち構えたように咲き始めます。その様はモノクロの映像が「総天然色」に切り替わったような、世の中が色を取り戻したような気になります。

新しい出会いに期待を膨らませ、別れを惜しむのもこの季節。今春、至誠ひの宿保育園の開設と至誠第二保育園の改修による定員増の関係などから至誠学舎立川でも大勢の職員を迎えました。人材難が叫ばれるなかなか心強い限りでしょう。100年を超す誇りある社会福祉法人の一員として「まことの心」を旗印に、新しい年度も力強く事業を推進していきましょう。

高齡事業本部長 旭 博之



事業本部情報

♥児童事業本部♥

1月に至誠大地の家の新しいグループホームが開設して、子どもたちが引っ越しました。それまで生活した近隣の皆さんへお礼と、新しくお世話になる近隣の皆さんへ子どもたちや職員とご挨拶をして回りました。グループホームで生活することは、地域の方々からいただく子どもの自立を育む機会がたくさんあります。新しい地域の皆様が応援団となっただけのように努力していきたいと思えます。

新しいグループホームは6人定員のホームが2棟隣接することで、スタッフが連携して生活を支えることができます。「双子型」と呼ばれ、至誠学園の実践から近年東京都でもオープンに認められるようになり、実現できました。

引っ越し前日、寒さのため給湯器の給水管が破裂し、初日から銭湯に通うというトラブルもありましたが、子どもたちは楽しんでいました（職員はお湯が使えず大変でした）。生活が落ち着くまで、まだまだかかりそうですが、どうぞよろしくお願ひします。



（至誠大地の家 施設長 高橋誠一郎）

♥保育事業本部♥

桜の花が満開の中、新入園児、進級園児の入園・進級を祝う会の季節が今年もやってきました。平成25年4月1日に定員135名で、渋谷区代々木に開園した代々木至誠こども園も満5歳の誕生日を無事迎えることが出来ました。法人にとっても、初めての認定こども園となり、保育園的にご利用の園児115名と、幼稚園的にご利用の園児20名が、地上3階建て1,800㎡以上ある園舎で毎日元気に過ごしています。

4月は新入園児（主に乳児）が多く、初めての環境に不安いっぱいの中から、安心できる環境へと時間をかけ丁寧に関わります。いつの間にか大人から離れ、環境に向かっていきます。一歩外に出ると、山手通りの広い歩道や代々木八幡宮の森、足を延ばせば代々木公園、都会でありながら周りは自然がいっぱいです。お近くにお越しの節はぜひお立ち寄り下さい。

（代々木至誠こども園 園長 稲永 裕子）

♥高齢事業本部至誠ホーム♥

恒例の至誠ホーム・サービス向上大会（第23回）が、今年も3月14日、アイムホールで開催されました。2月に行われた3回の地区大会に出場した全10サークルのうち、各地区大会から選ばれた3サークルの活動の発表があり、どの発表も聴き応えのあるものでした。その中でも、我がキートスブロック代表の、キートス・ホームヘルプの発表が最優秀賞に輝きました。

ホームヘルプ（訪問介護）サービスは、介護保険制度が発足した当初はショートステイ、デイサービスと並び「在宅三本柱」と呼ばれていました。しかし、近頃ではヘルパー確保難、ヘルパーの高年齢化（キートスでは平均年齢66.5歳）、度重なる介護報酬の削減等々、事業環境が厳しさを増す介護保険各事業の中でも、特に困難な状況にあるサービス種別の一つと言えます。

そのような中、キートス・ホームヘルプの取組みは、まずヘルパーさんの負担軽減を図り、ヘルパーさんの確保・定着を目指して始まりました。それが、結果的にはヘルパーさんの採用人数の増加のみならず、職員間の信頼関係を強めることや、利用者サービスの質の向上にも繋がったという活動内容でした。困難な状況に正面から立ち向かい、期待以上の成果を上げた活動に、皆大変勇気づけられた夜でした。

（至誠ホームキートス 園長 大友正樹）

本部事務局だより

ガバナンスのもう一つの側面の「意思決定の仕組み」を簡単にいうと「ワンマン(家長的)経営を排し会議体による相互牽制により組織経営を行う」ということです。ワンマン経営は意思決定のスピードが早いというメリットがある反面、経営会議や理事会で決定したことが、後から経営トップの一言で反故にされたり、トップが暴走しだすと止められないというデメリットがあります。逆に部下が知恵を回し、先にトップに根回し、反対意見を封じ込めるとか、会議で自分の意に反することが決定されるとトップに吹聴し決定を覆そうとする輩が現れたりします。こなると現場は混乱し、士気が低下し、組織の衰退は目に見えるより明らかになります。

新社会福祉法では、理事長の権限が強化された一方、評議員会と理事会、業務執行理事と他の理事が相互にチェック機能を発揮することが求められています。例えば「次回の理事会に上程します、報告します」といったことが実行されているか理事は相互にチェックしなければなりません。理事の皆さんは、法人全体を見渡す視座をもって判断いただかなければ「善管義務違反」に問われることとなります。百年の計は組織経営にいかに移行するかにかかっているのかもしれない。（法人事務局 事務局長 野島忠幸）

<編集後>4月になりました。根川沿いの桜並木も満開となりました。法人事務局の大きな窓からは、温かい春の日が差し込みます。園庭で遊ぶ子供たちの声にも癒されます。（お）